

2008年9月8日

シリーズ調査「われら信州人」
「郷土・地域意識編」

第3回調査

報告書

(2008年3月調査)

調査の設計	1
結果の概要	4
今回調査のポイント	10



社団法人 長野県世論調査協会

Tel 026-233-3616 Fax 026-233-3610

<http://www.nagano-yoron.or.jp>

＜シリーズ調査「われら信州人」のテーマ＞

	I	II
	第1回 1994年11月調査	第6回 2000年8月調査
郷土・地域意識編	・住みやすさ	・住みやすさ
	・長野県の将来の見通し	・長野県の将来の見通し
	・愛着感	・愛着感
	・住み続けたいか	・住み続けたいか
	・県民として誇れるもの、自慢できるもの	・他県と比べて平均以上と思えること
	・長野県民の気質	・長野県民の気質・人生観
		・自分の人生で長野県に住みたい時期
		・「ふるさと」と思う場所
		・信州のシンボル
	第2回 1995年11・12月調査	第7回 2002年5・6月調査
生活編	・現在の生活の満足度	・現在の生活の満足度
	・自由な時間の過ごし方	・自由な時間の過ごし方
	・普段感じている不安や悩み	・普段感じている不安や悩み
	・隣近所との交際状況	・隣近所との交際状況
	・今関心を寄せているもの	・お祈りや信心
	・食生活において気をつかうこと	・食生活において気をつかうこと
	・作っている自家製の漬物	・「食」への関心、こだわり
	・洋服・衣類を選ぶのは誰	・県外への外出
・情報・通信機器の中で現在家庭にあるものまた今後購入したいもの	・情報・通信機器の中で現在家庭にあるものまた今後購入したいもの	
	第3回 1997年3月調査	第8回 2004年4月調査
自然と環境編	・信州の自然について	・季節の好き嫌い
	・自然と人間の関係	・自然とのふれあい体験、野外活動
	・信州の自然は守られているか	・ダム、リゾート開発の是非
	・信州の自然景観について	・近隣からの環境被害
	・10年前と比べてどうか	・自然・生活環境で心配なこと
	・美観を損ねるもの	・省エネルギーの心がけ
	・環境保全のために日頃心がけていること	・自然・環境破壊をくいとめるものは何
・自然・環境破壊をくいとめるものは何	・メディアとの接触度合い	
		・内閣、政党、県政の評価
	第4回 1997年12月調査	第9回 2005年10月調査
家族編	・家族と話をする頻度	・家族と話をする頻度
	・結婚観	・結婚観
	・家庭の役割	・家族・家庭の役割
	・主導権を握るのは誰	・主導権を握るのは誰
	・家庭生活に必要なもの	・老後の親と子
	・子供に期待すること	・家庭の周辺 10年後は？
	・望ましい家庭生活	・子育て環境
	・青少年の犯罪の原因	・親と子・父と母
	・現在の家庭生活の満足度	・現在の家庭生活の満足度
	・老後の不安	・老後の不安
・親戚づきあいの程度		
	第5回 1999年3月調査	第10回 2006年10月調査
教育編	・子供への接し方	・子供への接し方
	・一芸、推薦入学の是非	・一芸、推薦入学の是非
	・習い事について	・習い事について
	・「長野県は教育県」と思うか	・教育と人生観
	・学校の完全週五日制について	・長野県の進学環境
	・期待する小学校の先生の資質	・学校活動への参加
	・いじめにあった子供の相談相手は	・望ましい義務教育のあり方
	・学歴の受けとめ	・自分は教育熱心か
	・中・高一貫教育への期待度	・中・高一貫教育への期待度
	・日本の教育の全体的な方向	・日本の教育の全体的な方向
・学習塾の必要性	・学習塾に通わせているか	

I 調査の設計

調査の目的

長野県世論調査協会が発足以来、基幹活動として取りくむ長期シリーズ「われら信州人」調査は、郷土に暮らす人々の行動や意識、さらには社会・自然観などを幅広く探り、地域に立脚して自立をめざすための指針を得ていくことがねらい。1994年の「郷土・地域意識」編を皮切りに「生活」「自然と環境」「家族」「教育」の5つの分野を循環させる方式で実施している。

1年1分野の取りくみは、3順目の通算第11回を迎え、今回の「郷土・地域意識編パートⅢ」は2000年以来、8年ぶりの実施となる。

この8年間は、1998年開催の長野冬季五輪に至る高揚期が過ぎて、長野県はその反動と不況のトンネルをくぐり抜けようと模索する時期に入り、田中康夫知事の登場による「改革路線」で県政、経済の施策、運営手法が大きく様変わりし、県民の生活と意識に影響を及ぼした。

この間、国内経済が回復へと進む一方で、県内への波及はいま一步の状態にとどまり、国の三位一体改革により地方財政ひっ迫に追い討ちをかけた。他方、時代の国際化・IT化・高齢化の三大変容は、新たな社会的格差を露わにさせ、地域では平成の大合併が住民意識を大きく揺るがせている。

こうした大きな変化の流れの中で、いま地方に住むことの満足感や、地域での人間関係はどんな状況にあるのか。郷土に対する誇りや住民の意識に変化はあるのか。地域に暮らすための物心両面の支え、行政に望む施策はどうなのか…あらためて県民各層の動向を掘り下げ、今後の方向を模索する調査内容とする。

調査の全般にわたり、飽戸弘・東洋英和女学院大学教授（学長）と、坂井博通・埼玉県立大学教授の監修を初回から仰いでいる。

調査の設計

- ▽調査対象 長野県内に住む20歳以上の男女1000人
- ▽抽出方法 層化三段無作為抽出法。対象の各市町村の選挙人名簿から抽出
- ▽調査時期 2008年3月15日～30日
- ▽調査方法 個別面接聞き取り
- ▽調査地点 19市10町6村の計69地点
(1地点15人が62地点 1地点10人が7地点)

回収結果

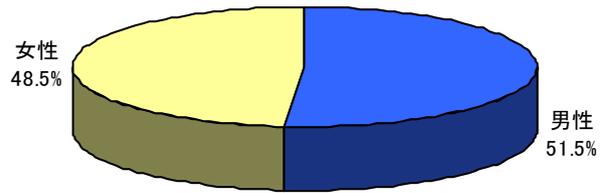
- ▽有効回答 728人（回収率72.8%） 男性375人 女性353人

<注>報告書のパーセント数字は小数点第2位を四捨五入。合計が100にならない場合がある。

回答サンプルの内訳

【性別】

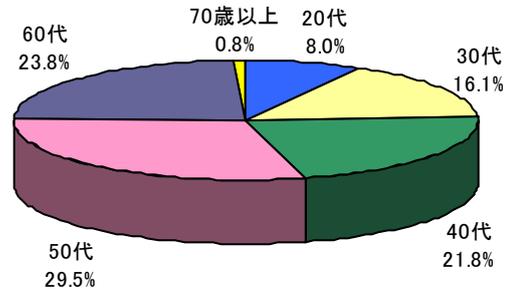
男性	375	51.5%
女性	353	48.5%



【年代】

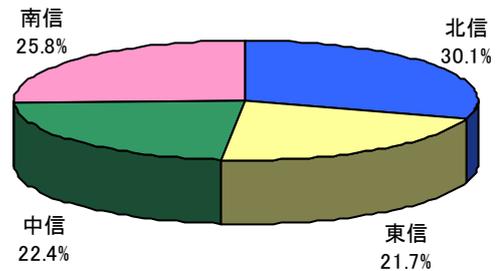
20代	58	8.0%
30代	117	16.1%
40代	159	21.8%
50代	215	29.5%
60代	173	23.8%
70歳以上	6	0.8%

※70歳以上は回収数が少ないため
関連データは参考値とする



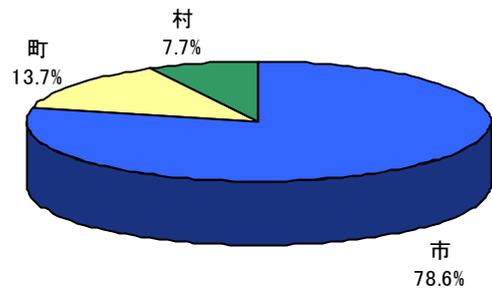
【居住地】

北信	219	30.1%
東信	158	21.7%
中信	163	22.4%
南信	188	25.8%



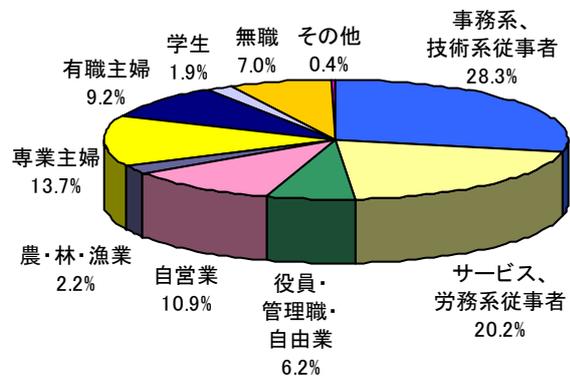
【市町村】

市	572	78.6%
町	100	13.7%
村	56	7.7%



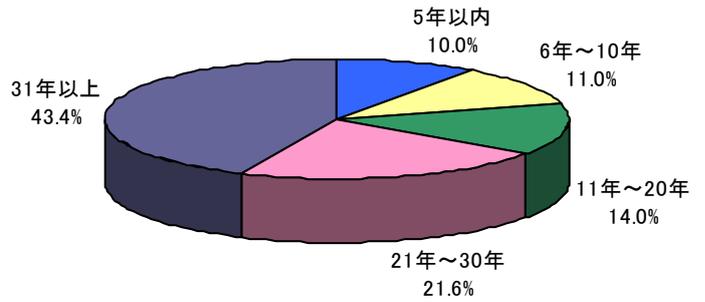
【職業】

事務系、技術系従事者	206	28.3%
サービス、労務系従事者	147	20.2%
役員・管理職・自由業	45	6.2%
自営業	79	10.9%
農・林・漁業	16	2.2%
専業主婦	100	13.7%
有職主婦	67	9.2%
学生	14	1.9%
無職	51	7.0%
その他	3	0.4%



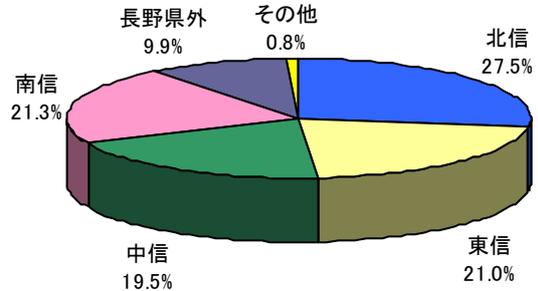
【居住年数】

5年以内	73	10.0%
6年～10年	80	11.0%
11年～20年	102	14.0%
21年～30年	157	21.6%
31年以上	316	43.4%



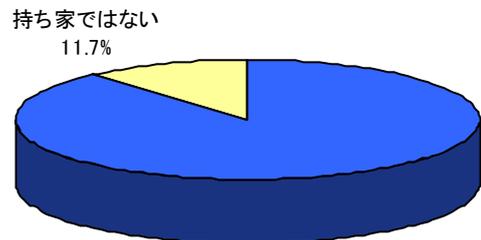
【出身地】

北信	200	27.5%
東信	153	21.0%
中信	142	19.5%
南信	155	21.3%
長野県外	72	9.9%
その他	6	0.8%



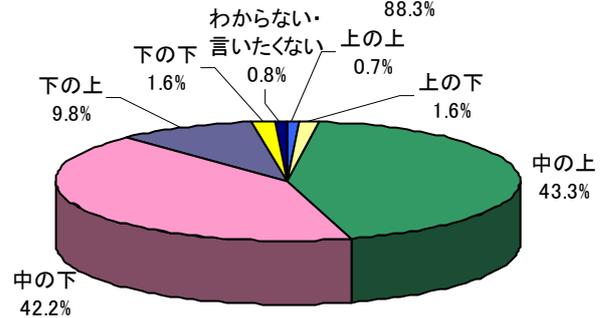
【住居】

持ち家	643	88.3%
持ち家ではない	85	11.7%



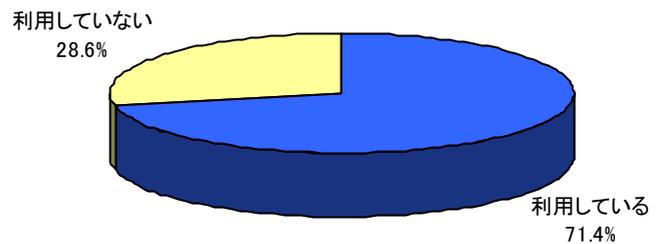
【暮らし向き】

上の上	5	0.7%
上の下	12	1.6%
中の上	315	43.3%
中の下	307	42.2%
下の上	71	9.8%
下の下	12	1.6%
わからない・言いたくない	6	0.8%



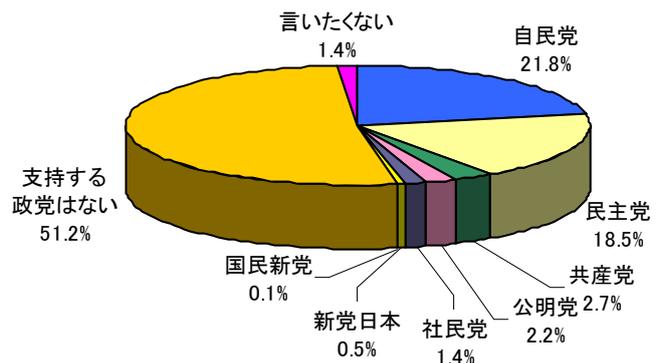
【インターネット】

利用している	520	71.4%
利用していない	208	28.6%



【支持する政党】

自民党	159	21.8%
民主党	135	18.5%
共産党	20	2.7%
公明党	16	2.2%
社民党	10	1.4%
新党日本	4	0.5%
国民新党	1	0.1%
その他の政党	-	-
支持する政党はない	373	51.2%
言いたくない	10	1.4%



II 結果の概要

郷土の「いま」への思い

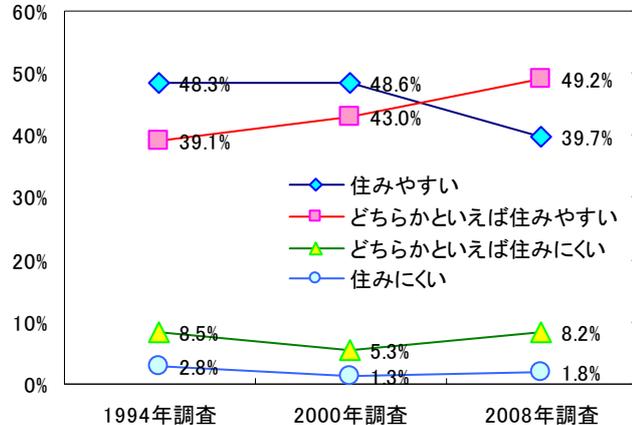
住みやすさ

消極的な「どちらかといえば」高まり半数

「住みやすい」が第1回調査から引き続き、総体で90%前後の高率をキープ。半面、積極的なスタンスは約40%と、8年前の第2回調査よりも9ポイント落ち込み、消極的な「どちらかといえば住みやすい」が上昇して約半数を占めた。

◆ 中・東信で高く、北・南信で低め

男女にめだつた違いはみられないが、積極的な面で中信、東信が高く、北信、南信は低めの地域差があり、県外出身者が同様の低レベルにある。また、自分の居住地への愛着と住みやすさが連動している。



住みやすいと思う点

トップ「気候や自然」減り 「交通の便」2位浮上

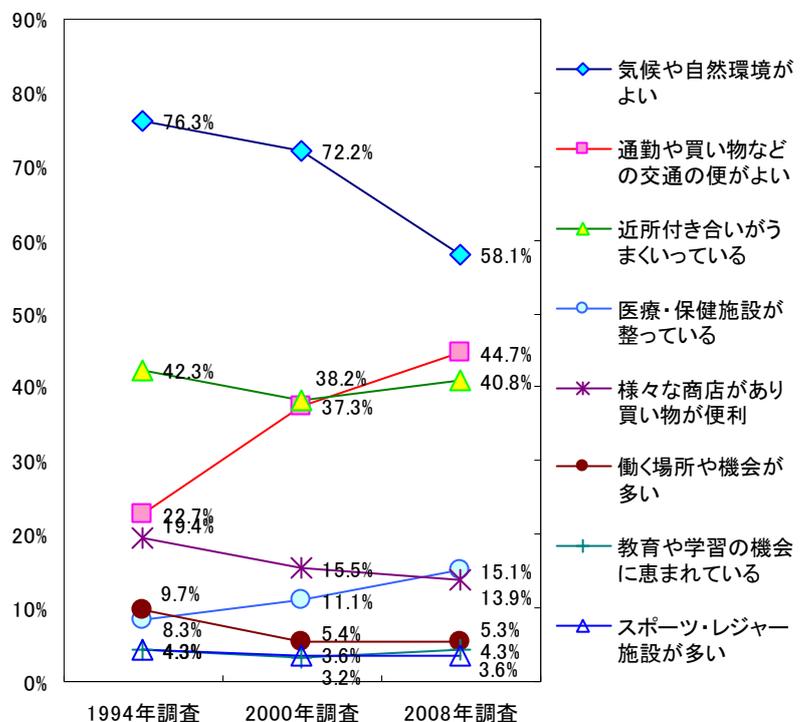
「気候や自然環境がよい」がこれまでと同様にトップ。しかし、前回よりも14ポイントの大幅ダウン。二番手には「通勤や買い物などの交通の便がよい」が浮上し、従来2位だった「近所付き合いがうまくいっている」は順位を下げた。大きく差が開いて、4位には「医療・保健施設が整っている」が上がった。

上位のうち「近所付き合い」は女性で同率2位にランクされる。

◆ 気候や自然 東・南信で高め

トップ「気候や自然」は、東・南信で高く、北・中信では低めのコントラストがあり、村部で約80%に届く高率を示し、町部70%、市部54%と下がっていく。

「近所付き合い」でも同様の傾向がみられる。しかし、「交通の便」では、それらの濃淡が逆向きになる。



住みにくいと思う点 交通、買い物「不便」急伸 「医療施設」3位続く

前回調査より上位が乱高下して様変わりした。「通勤や買い物などの交通の便が悪い」が跳ね上がって他を引き離すトップ。

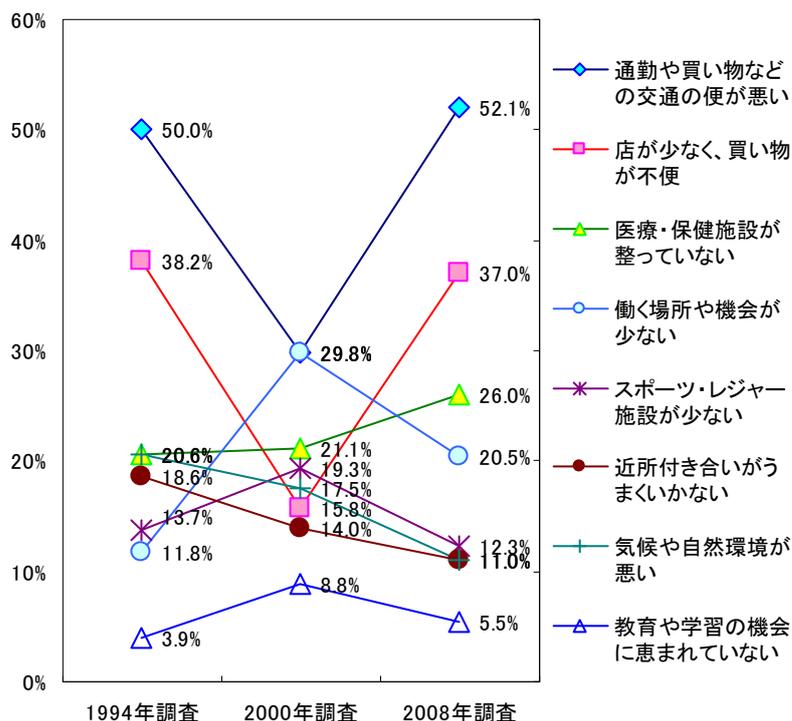
半面、前回トップに並んだ「働く場所や機会が少ない」が4位に急落。2位には「店が少なく買い物が不便」が6位から急上昇。「医療・保健施設が整っていない」も増えて3位が続く。

◆ 交通の便・働く場 村部高め

男女差がめだち交通・買い物が「不便」や「働く場所」「スポーツ・レジャー施設が少ない」で男性が引き離す。女性は「医療・保健施設」や「近所付き合い」が高めになる。

年代層では40代が「交通の便」、20代は「買い物不便」「医療・保健施設」の不満感が突出する。

地域的には「医療・保健施設」で町村部、「働く場」では村部で高まる。

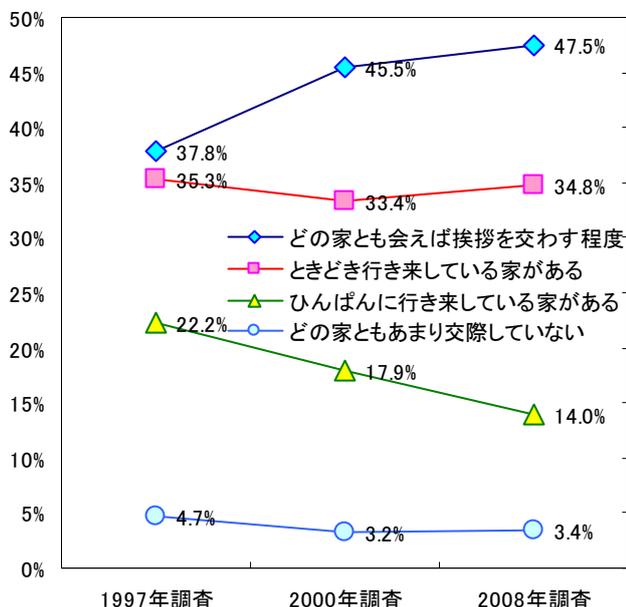


地域の暮らしぶり

隣近所との交際 「挨拶する程度」じり高 「頻繁に行き来」下降

「どの家とも会えば挨拶を交わす程度」が増え続けて半数近くのにのぼりトップを維持。「ときどき行き来している家がある」が35%で2番目に入り、かなり差が開いて「ひんぱんに行き来している家がある」が続く。「どこの家ともあまり交際していない」はごく少ない。

交際の程度の順位は前回調査と変わらないが、第1回調査からみると「挨拶程度」が増え続ける一方で「頻繁に行き来」は減少し、交際がより淡泊になっている。



◆ **あいさつ程度** 20代で60% **ひんぱんに行き来** 60代、村部、持ち家層高め

男女にめだつた違いはみられないが、若い年代層ほど「挨拶程度」が高まり、20代では60%に達する。他方、60代では「ひんぱんに行き来」が20%と高めになる。また、中高年齢層で「ときどき行き来」が高まる。

地域的には村部の行き来が「ひんぱん」「ときどき」とともに最も高く、持ち家層でも似た傾向がみられる。

地域で参加の活動 「地域の役員」「掃除」「祭り」大幅伸び

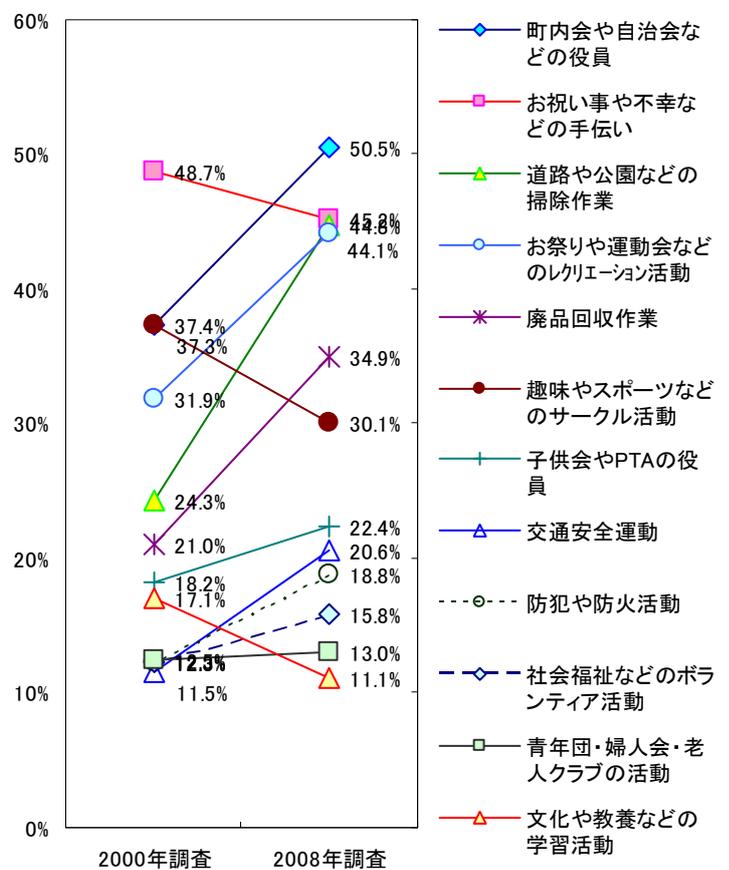
上位6つに入る活動は8年前の前回調査と変わらないが、その順番はかなりの変動がみられる。トップは「町内会や自治会などの役員」（前回2位）で10ポイント以上伸びて50%に達した。

2位は前回トップの「お祝い事や不幸などの手伝い」がやや減少の45%。僅差で続く上位には「道路や公園などの掃除作業」（同5位）と「お祭りや運動会などのレクリエーション活動」がともに急伸して並ぶ。半面、前回3位だった「趣味やスポーツなどのサークル活動」は落ち込み6位にとどまる。

◆ **高齢、村部、地域愛着の層が積極的**

男性が地域の「役員」や「レクリエーション活動」で高め。女性は「サークル活動」や「子ども会やPTAの役員」といった“役割分担”が多少みられる。

総じて、高い年代層、村部、居住地への愛着の高い層が地域活動を活発に担っている傾向が現れている。

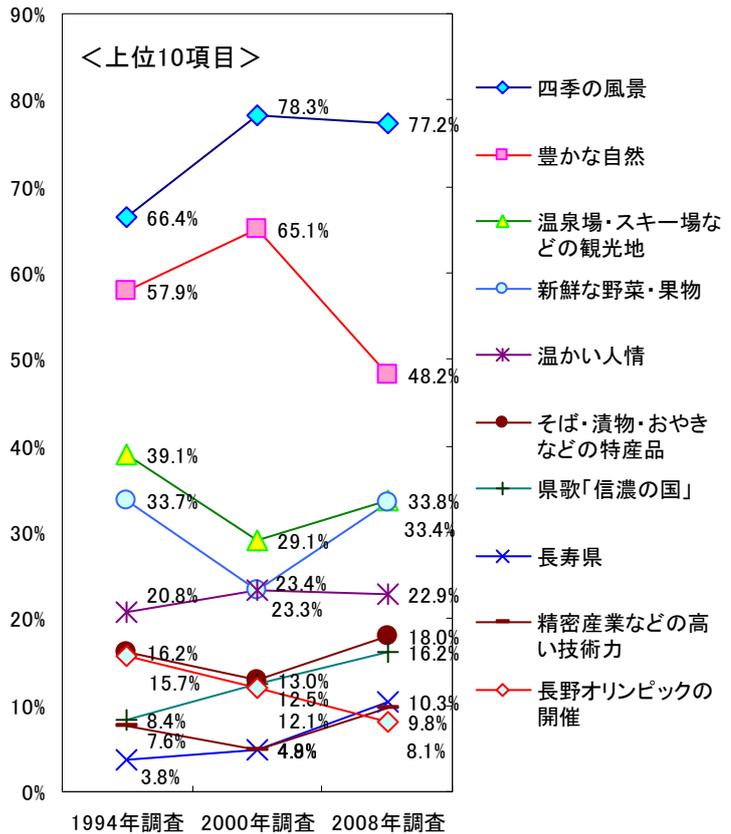


が「自然」は大幅ダウン、対照的に「観光地」はアップ。「新鮮な野菜・果物」も上昇して僅差で4位、「温かい人情」はわずかに減り5位に順位を下げた。

「風景」は男女を通じて高く50代以上では80%前後に伸びる。男性が「自然」でリード、女性は「野菜・果物」「人情」で上回る。若い年代層で「自然」「観光地」が高めになる。

◆ **温かい人情** 村部で2位ランク

地域差がめだち「風景」は村部で最も高く「人情」が2番目にランクされる。「自然」は町部で高く「観光地」「野菜・果物」は市部で高くなっている。また、県外出身者では「観光地」が高い。

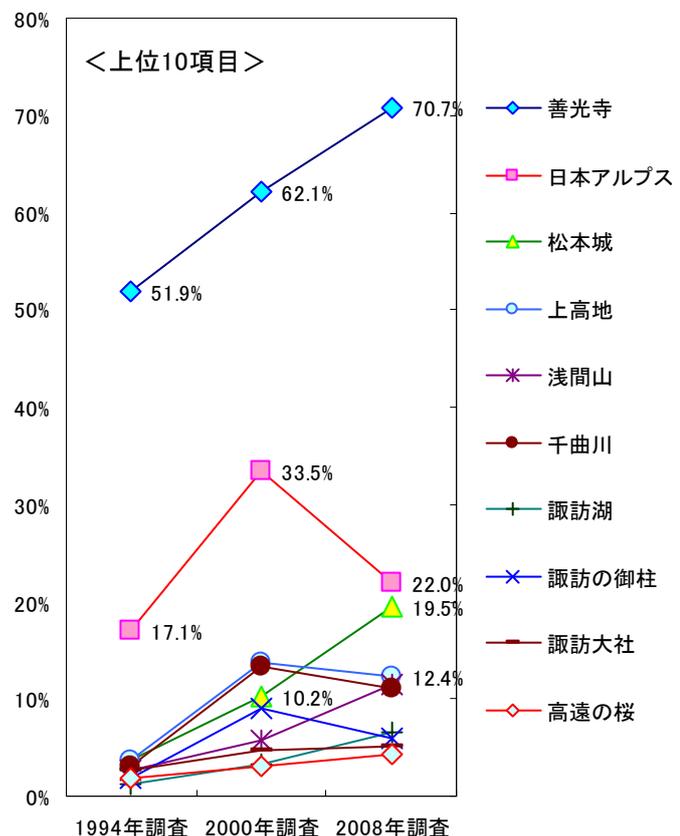


シンボルと思うもの 「善光寺」「松本城」共にアップ 「アルプス」低下

「善光寺」の右肩上がりの伸びは70%に達し、断然トップは動かない。半面「日本アルプス」は2位を維持したが、前回よりも10ポイント以上落ち込んだ。逆に「松本城」は大幅アップで3位をキープした。

◆ **善光寺** 20代が最も高く

「善光寺」は女性が大きく男性を引き離し「松本城」でも上回る。男性は「上高地」「浅間山」でリード。年代層では、20代で「善光寺」と「アルプス」が最も高いのが目を引く。



長野県民の気質 「伝統の重視」首位を貫く 続く「努力」「連帯意識」

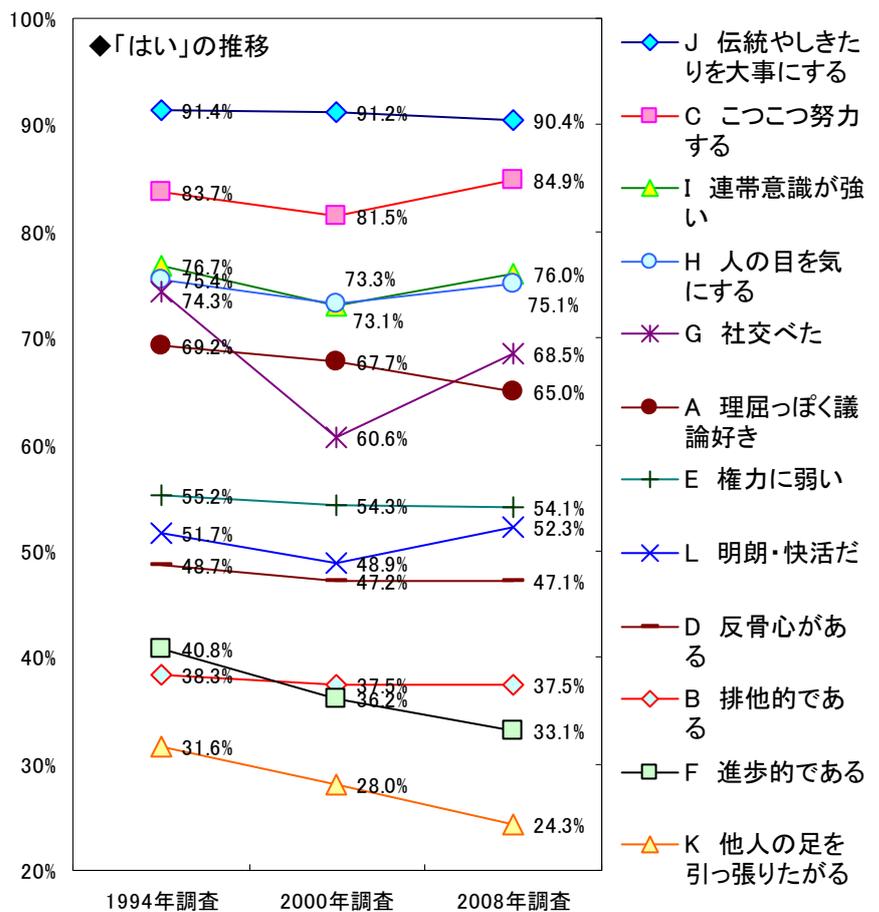
「伝統やしきたりを大事にする」が第1回調査以来のトップを守り、90%台の高率を保った。2位も「こつこつ努力する」がややアップして変わらず、3～4位は「連帯意識が強い」「人の目を気にする」が僅差で順位が入れ替わった。総じて、肯定的な気質が高めにランクされている。

◆「他人の足ひっ張る」最下位

前回6位の「社交べた」が大きく伸びて5位に浮上し「理屈っぽく議論好き」が6位に後退した。

最下位は「他人の足を引っ張りたがる」で「進歩的である」「排他的である」が下位クラスにランクされる。

男女で見ると「伝統やしきたりを大事にする」では共通するが、男性が「社交べた」「理屈っぽく議論好き」「反骨心がある」で高め。女性では「こつこつ努力する」「連帯意識が強い」「人の目を気にする」が上回る。



Ⅲ 今回調査のポイント

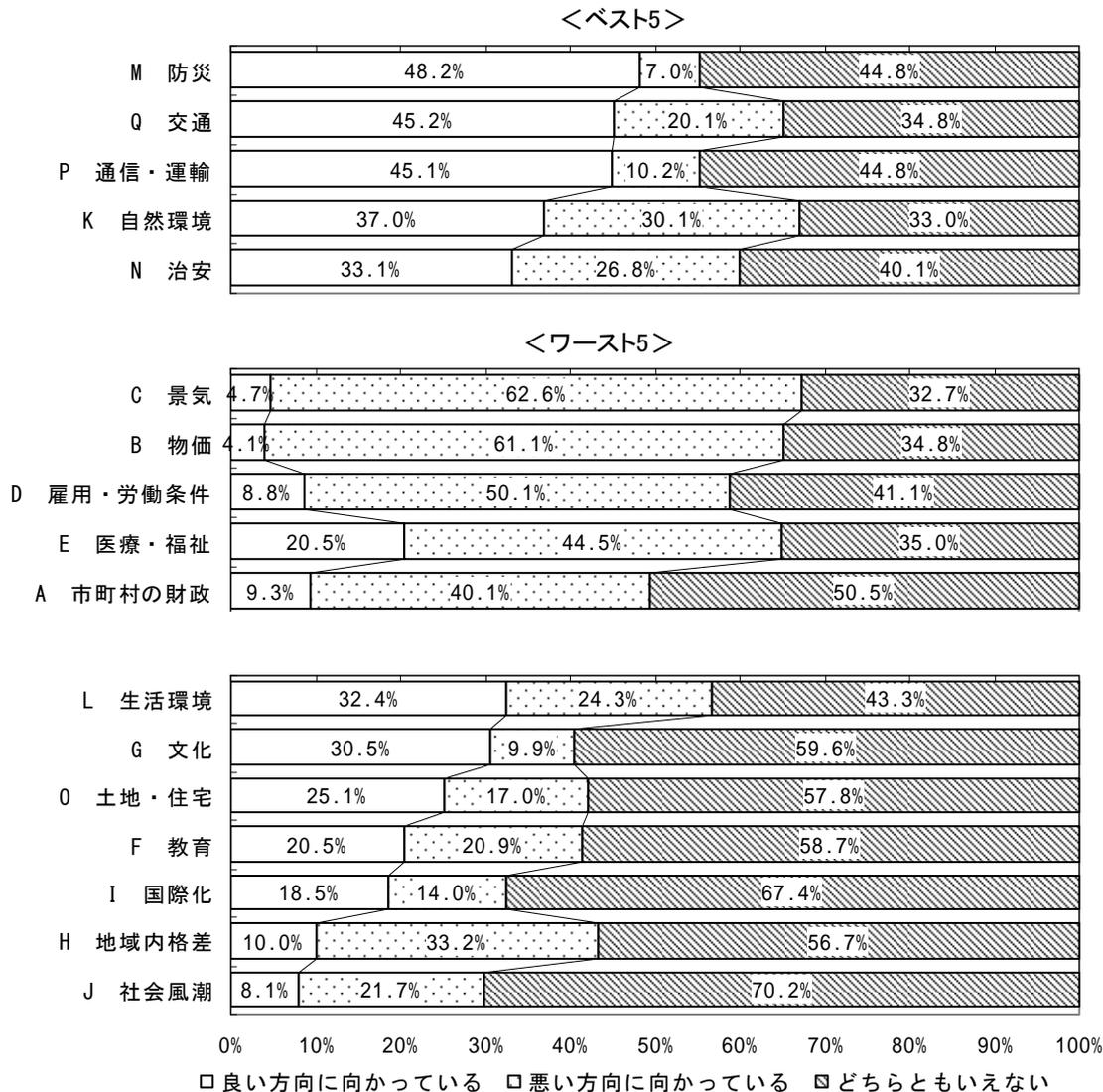
郷土の「あす」に託す

地元市町村の向かっている方向

良い方向「防災」トップ 続く「交通」「通信」

「良い方向に向かっている」が最も高いのは「防災」で半数に迫り「交通」「通信・運輸」がベスト3。次いで「自然環境」「治安」が上位に入った。

「悪い方向に向かっている」は「景気」が筆頭に置かれ63%。僅差で「物価」「雇用・労働条件」がワースト3。次いで「医療・福祉」「市町村の財政」の見通しが厳しい。



◆ ワースト3「景気」「物価」「雇用」 中高年齢層、町村部で見通し厳しく

「良い方向」トップの「防災」は村部で60%近い高さで、東信と南信で高め。対照的に「交通」「運輸・通信」では市部で高くなり、男性が女性を引き離す。

「悪い方向」トップの「景気」は男性がやや高めで、年代層が高まるほどに厳しくなり、60代では約70%に達する。「物価」でも中高年齢層で高めだが、男性よりも女性の悲観的な度合いが高まる。「雇用・労働条件」は男性が高めで、50代で60%台に突出する。ワースト3は、いずれも町村部の見通しが厳しい。

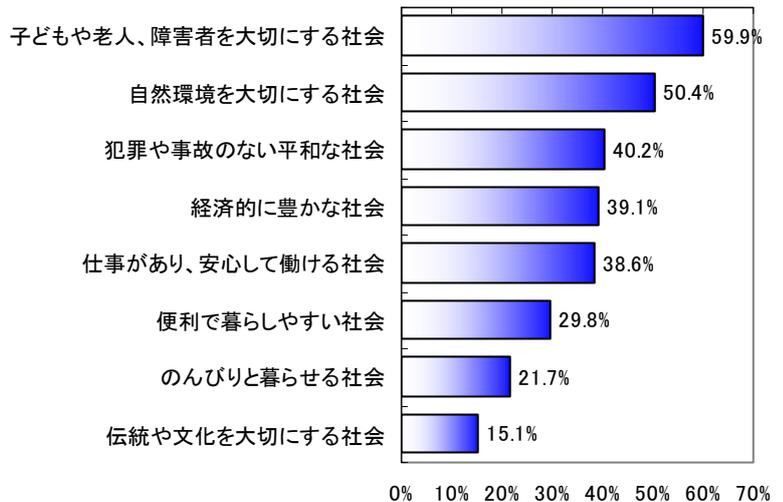
長野県がめざしてほしい社会

「弱者」と「自然環境」を大切にする一上位に続く

「子どもや老人、障害者を大切にする社会」が最も多く60%に達し、2位は「自然環境を大切にする社会」が50%で続く。

差が開いて、3～5位に「犯罪や事故のない平和な社会」「経済的に豊かな社会」「仕事があり、安心して働ける社会」が一同になって並ぶ。

下位には「伝統や文化を大切にする社会」「のんびりと暮らせる社会」が置かれる。



◆ 「経済的に豊かな社会」 村部が大きく引き離す

トップの「弱者」を大切に」は女性がリード。「犯罪や事故がない」でも男性を大きく上回る。男性は「のんびりと暮らせる社会」がめだつ程度。地域的には「弱者」を大切に」で違いはみられないが「自然環境を大切に」「犯罪や事故がない」で市部が高め。「経済的に豊か」では村部が大きくリードし「安心して働ける」でも町村部で高めになる。

長野で過ごす人生の時期 もう一度やり直すのなら

「リタイア後」「高校まで」高率続く 「就業」「大学」も上向く

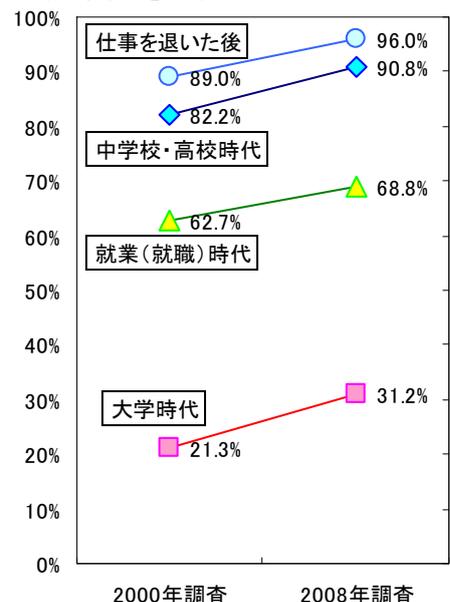
これまで長野県外で1年間以上生活した経験が「ある」が54%、「ない」は46%の色分け。「ある」が男性で高めで、40代や村部では60%前後に伸びる。

もう一度やり直すとすれば「県内」を望む人生の時期は、いずれも前回調査よりアップ。順番に変動はなく「仕事を退いた後」が最高の96%。「中学校・高校時代」が続き90%台に乗った。「就業（就職）時代」も伸びて70%に迫り「大学時代」も10ポイント上昇した。

◆ 「大学時代は県内で 県外出身者で平均値上回る

男女にめだつた開きはみられないが「大学」「就業」で30～40代がやや落ち込んでいる。県外出身者の受けとめでは「県内」で過ごしたいは「大学」のみ平均値を上回り「中学校・高校」と「就業」では大きく落ち込む。「リタイア後」はほぼ平均値に沿う格好になっている。

◆ 「長野県内」の推移



今後も長野に住み続けたいか

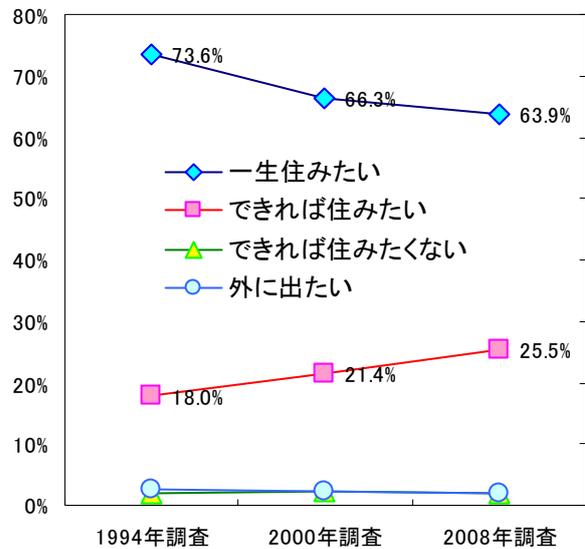
「一生住みたい」下降めだつ60代

「一生住みたい」の積極さが60%を超え、最も多くを占める状態は変わらないが、緩やかな減少も続く。その分、消極的な「できれば住みたい」が増える流れがある。

◆ 一生住みたい 村部で高く 4人に3人

「住みたい」総体で男性がやや高め、村部では「一生住みたい」だけで4人に3人を占める。

年代層が高まるほどに「一生住みたい」が高まり、60代78%－20代38%の落差が著しい。半面、その推移をみると、20代でこの8年間で上向いているのに対し、60代では第1回調査から減少を続け、この14年間で、13ポイントの大幅な落ち込みが際立つ。

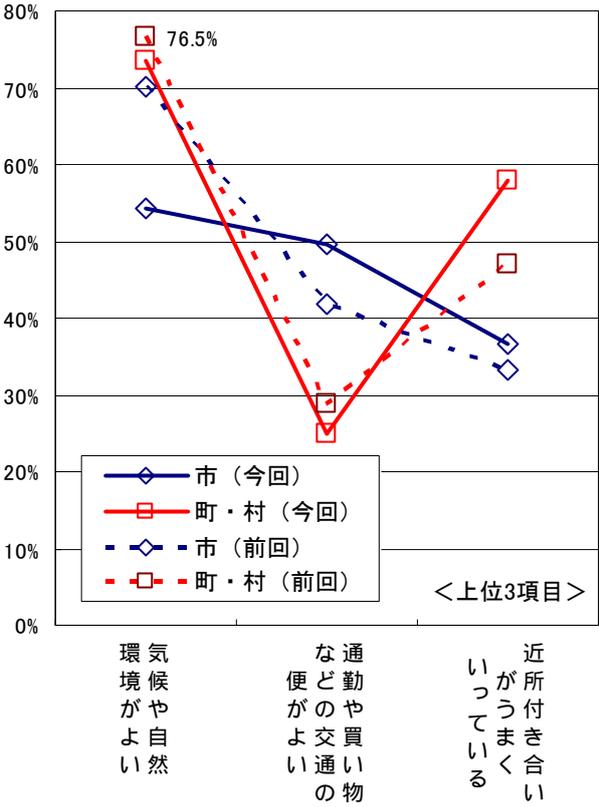


今回調査のまとめ

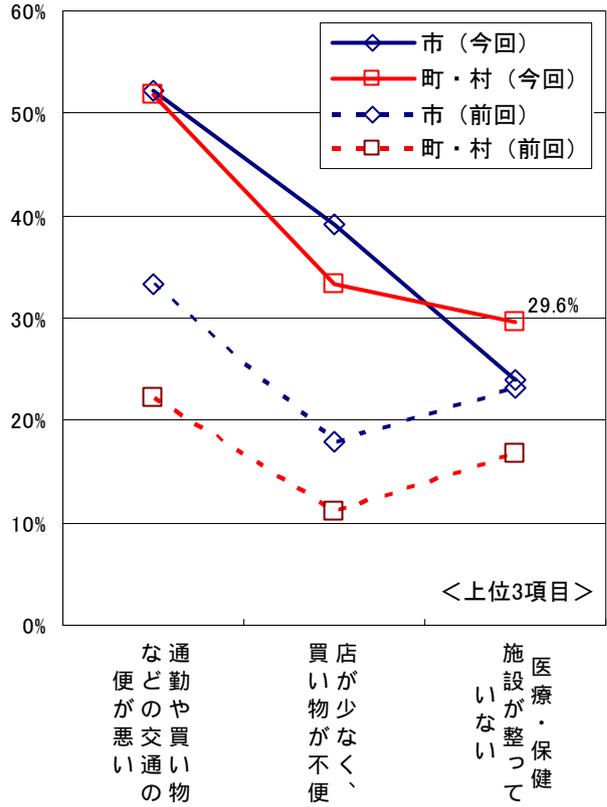
◆ 変わる「住みやすさ」の度合い

今住んでいる所が「住みやすい」は「愛着がある」と連動して、90%前後の高率をキープ。しかし、積極的な住みやすさよりも「どちらかといえば」の消極的な受けとめが増え約半数を占める。なかでも、積極面で町村部の落ち込み（今回31%—前回・2000年48%）がめだつ。

◆住みやすい点



◆住みにくい点



「住みやすいと思う点」は「気候・自然環境」がトップを維持したものの、前回より市部の落ち込みがめだつ。対照的に、町村部で「近所付き合い」が伸びている。

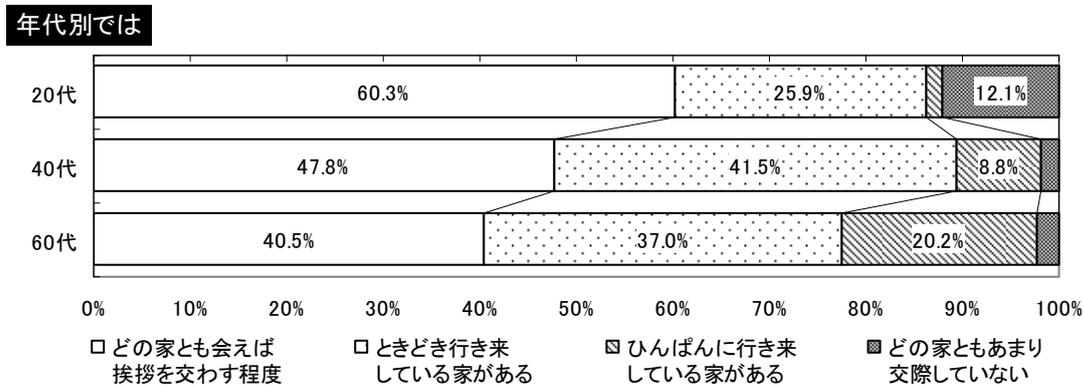
「住みにくいと思う点」では、前回の上位3つがそろってアップ。トップの「交通の便」が大幅に高まり、市部、町村部が並ぶかたちになった。しかし「買い物が不便」は市部が上回り「医療・保健施設」は町村部が引き離す。

◆ 根強い「自然環境」への愛着

長野の暮らしで「自然に接する機会が多い」が80%を突破し、住みやすい点で「気候や自然環境」が3回の調査を通じてトップをキープ。長野の誇り・自慢できるものでも「四季の風景」「豊かな自然」が上位を占め、信州人の自然に対する愛着の強さは揺るがない。住んでいる市町村が「良い方向に向かっている」の項目で「自然環境」は4位にランクされる。

◆ 希薄化する近隣付き合い 地域参加は活発化

隣近所との交際は「会えば挨拶を交わす程度」が右肩上がりでも半通近くになり最も多い。とりわけ、20代では60%に達し、市部でも半数を占める高さ。逆に「ひんぱんに行き来している家がある」は減り続け14%程度。60代や町村部で高めだが、近隣との付き合いは希薄の度を増している。



他方、地域の活動への参加は「町内会や自治会などの役員」がトップ。「道路や公園などの掃除作業」「お祭りや運動会などのレクリエーション活動」「廃品回収作業」がいずれも前回調査よりも大幅に伸びて上位を保ち「地域単位の活動」への参加が活発になっている。

「お祝い事や不幸などの手伝い」が2位に挙げられたが前回よりも減少。「個人単位の活動」の「福祉ボランティア」「クラブ活動」「学習活動」などは全般的に振るわない。

◆ 都会に距離を置くスタンス

「都会は住む所ではなく、楽しみに出かける所」という考え方に、賛成が85%の高率。20代で90%台に伸び、年代層で最も高くなっている。「子・孫を育てるには都会の方が良いと思う」には、肯定的な受けとめが10%に満たない。

「長野に住むのは不便・不利だと思うことが多い」とする考え方には、否定的な受けとめが80%台に達し、都会に対する一定の距離を置く姿勢がはっきり。

もう一度やり直すなら「人生の時期」を県内・都会のどちらで過ごしたいか、との問いに「仕事を退いた後」と「中学校・高校時代」は県内を望むが90%台に伸びた。また、これまで振るわなかった「大学時代」と「就業（仕事）時代」も上昇し“都会離れ”の流れが強まった。

◆ 暮らしの先行き不安強く

自分の住む市町村の先行きが「良い方向に向かっている」と思うのは「防災」を「トップ」に「交通」「運輸・通信」が上位。逆に「悪い方向に向かっている」は「景気」を筆頭に「物価」「雇用・労働条件」の順。

基礎的な社会基盤の進み方に明るさを見出しているのと対照的に、経済や暮らしの面での不安定さ、見通しの暗さが前面に押し出されている。